

2-3. 瀧山寺鬼祭りにみる歴史的風致

(1) はじめに

瀧山寺¹鬼祭りは、旧暦正月7日(現在は旧暦正月7日に近い土曜日)に瀧山寺を舞台に行われ、燃え盛る松明^{たいまつ}を乱舞させる若衆の火の競演が特徴の祭りである。祭り当日の行事は、行列、仏前法要、御礼振り、鬼塚供養、庭祭り(田遊び)、火祭りである。火祭りに3匹の鬼が登場することから、一般的に「鬼祭り」と呼ばれている。

(2) 瀧山寺鬼祭りの歴史

瀧山寺鬼祭り(重要無形民俗文化財)の起源は鎌倉時代、源頼朝^{みなもとよりとも}の祈願に始まると伝えられている。室町時代に一時廃絶したが、正保4年(1647)3代将軍家光から学頭青龍院亮盛^{がくとう りょうせい}に当年から毎年、瀧山寺において天下泰平の祈願をするように命じられ、以後、鬼祭りは徳川幕府の行事として盛大に行われるようになった。明治維新後、徳川幕府の庇護を失い、さらに神仏分離が影響して明治6年(1873)に休止となった。



図2-3-1 瀧山寺鬼祭り(火祭り)

しかし、明治10年(1877)以降、青木川沿いに設置され、普及したガラ紡^{ぼう}の経済的繁栄が大きな原動力となり、明治21年(1888)に瀧村により再開された。

瀧山寺の鬼祭りは五穀豊穰を祈る寺院の正月行事である修正会^{しゆしやうえ}²と、大晦日の夜に悪鬼を払う宮中行事である追儺式^{ついな}³が変化した鬼祭り、火祭りが一体となった行事とされている。瀧山寺の修正会に関する記述の初見は、嘉禄2年(1226)で、この時期に修正会が行われていたことは明らかである。また、天明2年(1782)成立の『三州瀧山寺人日法会記』^{さんしゅうたきさんじじんじつほうえき}にも瀧山寺修正会鬼祭りについての記述がある。しかし、鬼祭りがどのように組み合わさって展開してきたかは明らかでない。ただし、鬼祭りに登場する鬼の面は室町時代前半期の作とされている。修正会に鬼が登場すること、鬼が登場する前に田遊びが演じられることも瀧山寺鬼祭りの特徴である。

¹ 「瀧山寺」と「瀧山寺」の表記については、本書では常用漢字の「瀧」を使用するが、史料名は原文のままとし、指定文化財は指定名称の表記に従った。

² 寺院で正月に修する法会。旧年の悪を正し、その年の吉祥を祈願する。

³ 大晦日(12月30日(旧暦))の宮中の年中行事であり、平安時代の初期頃から行われている鬼払いの儀式

祭りに登場する鬼は、祖父面・祖母面・孫面の3匹の鬼であるが、かつては父面・母面も存在したと伝わる。ある年の祭りの日に、山伏と称する2人の男が来て「鬼面を我らに被らせよ」と要求した。鬼面を被る者は、本堂に籠ったり、滝に打たれたりして7日間身を清めなければならないとされていたが、無造作に取って被り、祭りに参加した。祭りが終わって、その面を脱ごうとしたところ、顔面にくっついて離れず、息が詰まって死んでしまった。村人は哀れみ、本堂の西に葬り、塚を築いた。今も鬼塚伝説として伝えられている。この時、父面・母面も2人と共に埋められたので、父面・母面は現存していないという。

(3) 建造物

① 滝山寺

役小角⁴が滝壺より得た薬師如来を祀るとする開創伝承がある天台宗寺院で、物部氏、熱田大宮司家、鎌倉幕府、足利氏、徳川幕府と時の権力者により寄進を受けた。源頼朝の従兄である僧寛伝の縁で頼朝の齒と鬢を収めた運慶・湛慶作の木造観音菩薩・梵天・帝釈天立像(重要文化財)、『瀧山寺縁起⁵』等、中世からの重要資料を多く所蔵している。

滝山寺は『瀧山寺縁起』によれば、飛鳥時代、天武天皇の御代、当地に分け入った役小角が滝壺から拾い上げた薬師如来を本尊とし、吉祥寺と号して創建され、後に滝山寺に改められたという。滝山寺が本格的な寺院として成立するのは中世であり、滝山寺は、東海道筋の矢作東宿から足助(豊田市)、信州へ続く街道より分岐し、三河山間部へと至る道上の重要な場所に位置し、多くの人々、物資、文化の通過点であった。この頃、滝山寺は伽藍として最盛期を迎えた。

鬼祭りの際、3鬼や大松明を持った人々が外陣、回廊を駆け抜け、本堂を焦がすほどの熱気に包まれる滝山寺本堂(重要文化財)は、鎌倉時代末期から室町時代前期の建築で桁行5間(約9メートル)、梁間5間(約9メートル)の和様である。

鬼祭りの行列の起点となる滝山寺三門(重要文化財)は、文永4年(1267)に飛騨権守藤原光延が建立したとされる。三間一戸、こけら葺の楼門で、逆垂木を恥じた棟梁が楼上から飛び



図2-3-2 滝山寺本堂(重要文化財)



図2-3-3 滝山寺三門(重要文化財)

⁴ 7、8世紀に大和の葛城山にこもって修行した呪術者であり、修験道の開祖といわれる。

⁵ 滝山寺の由緒・来歴を記した書物。著者は滝山寺の僧侶とみられる。

降りたとする伝説があり、祭りの「行列」の際に歌われる「瀧山寺鬼祭りの唄」の歌詞にも表現されている。

②日吉山王社

瀧山寺中興の祖^{ぶつせんえいぐ}仏泉永救により 12 世紀前半に鎮守として近江より勸請され、神仏^{しんぶつしゅうごう}習合の様相を今に伝えているのが、日吉山王社本殿(市指定有形文化財)である。全国的にも希少な七間社^{しちけんしゃ}流造^{ながれづくり}で、身舎^{みや}の内陣は七間以上の流造にみられる三間社^{さんけんしゃ}を連結した構造ではなく、横長一室の一体型内陣として造っている点が注目される。現在の社殿は初代将軍家康公、3代将軍家光によって建立、修築されている。



図2-3-4 日吉山王社(市指定有形文化財)

鬼祭りの境内における祭礼は、日吉山王社及び後述の瀧山東照宮神前での長刀^{ながなた}御礼振りにより始まる。また、火祭りの松明は日吉山王社の前庭で灯されており、祭りでの重要な役割を果たす建造物である。

③瀧山東照宮

瀧山東照宮(重要文化財)は、正保元年(1644)、3代将軍家光が家康公の生まれた岡崎城の近くにも東照宮を観請したいと考え、古跡であり、家康公に縁深い瀧山寺に勸請することになり、正保3年(1646)に境内東奥に建立された。久能山、日光と合わせて日本三東照宮といわれ、幕府から厚く保護されてきた。瀧山東照宮の造営は、当時荒廃の一途^{ただ}を辿っていた瀧山寺の再興に拍車をかけたとされている。



図2-3-5 瀧山東照宮(重要文化財)

瀧山寺、瀧山東照宮の境内地には、石灯籠が林立している。これは、東照宮造営時に諸大名、岡崎藩主から奉納され、以後代々の岡崎藩主の寄進を受けたものである。

(4)活動(瀧山寺鬼祭り)

①準備

鬼祭りの主役である鬼面をかぶる冠面者^{かんめんじや}は厄年の男性から選ばれる。冠面者は、厄落^{やくお}としのために、7日間精進潔斎^{しょうじんけっさい}をして面を被る。精進潔斎の内容としては、四足^{よつあし}の物、鶏肉、卵、牛乳も禁忌で、以前は別火^{べっか}で男手のみで生活していたと伝えられている。現在は、60歳以上の女性が作ればよいとされている。祭り当日の朝、冠面者3人と手引き^{てづき}⁶で、滝山寺南東に位置する寺の草創伝説^{そうそうでんせつ}に関わり、近世の村絵図にも描かれている「三界の滝^{さんがい}」と呼ばれる滝壺^{たき}に行って水を汲んでくる。汲んできた水を風呂に入れて沸かし、最後の潔斎をして祭りに臨む。祖母面役がカマド口で火の番をすることになっている。



図2-3-6 三界の滝

鬼祭りの中心となる十二人衆も大役を無事に勤めるため、多くの準備を行う。十二人衆は「谷ノ衆^{たにのしゅう}」とも呼ばれ、滝山寺周辺の十二谷からの代表者を示す役職として現在も伝わっている。十二人衆は滝山寺を支援し、年貢・田畑の管理をする等の役目を担っており、年貢を徴収する集落的な単位が「谷」であったと考えられる。「谷」の存在については鎌倉時代に成立した『瀧山寺縁起』に記述があることから、十二人衆も平安時代末には組織されていたと推定される。祭りの際、以前は十二人衆も冠面者と同様に旧正月元旦から7日間、宿において男性のみで精進潔斎していた。現在は宿泊こそしていないものの、宿を借りて、前日と当日の2日間、食事、練習、打合せに関して精進潔斎を行っている。



図2-3-7 十二人衆の宿での練習風景



図2-3-8 大松明の作成

⁶ 火祭りの際に冠面者の手を引き補助する役。祖父面・祖母面には2人、孫面には5人の手引きがつく。

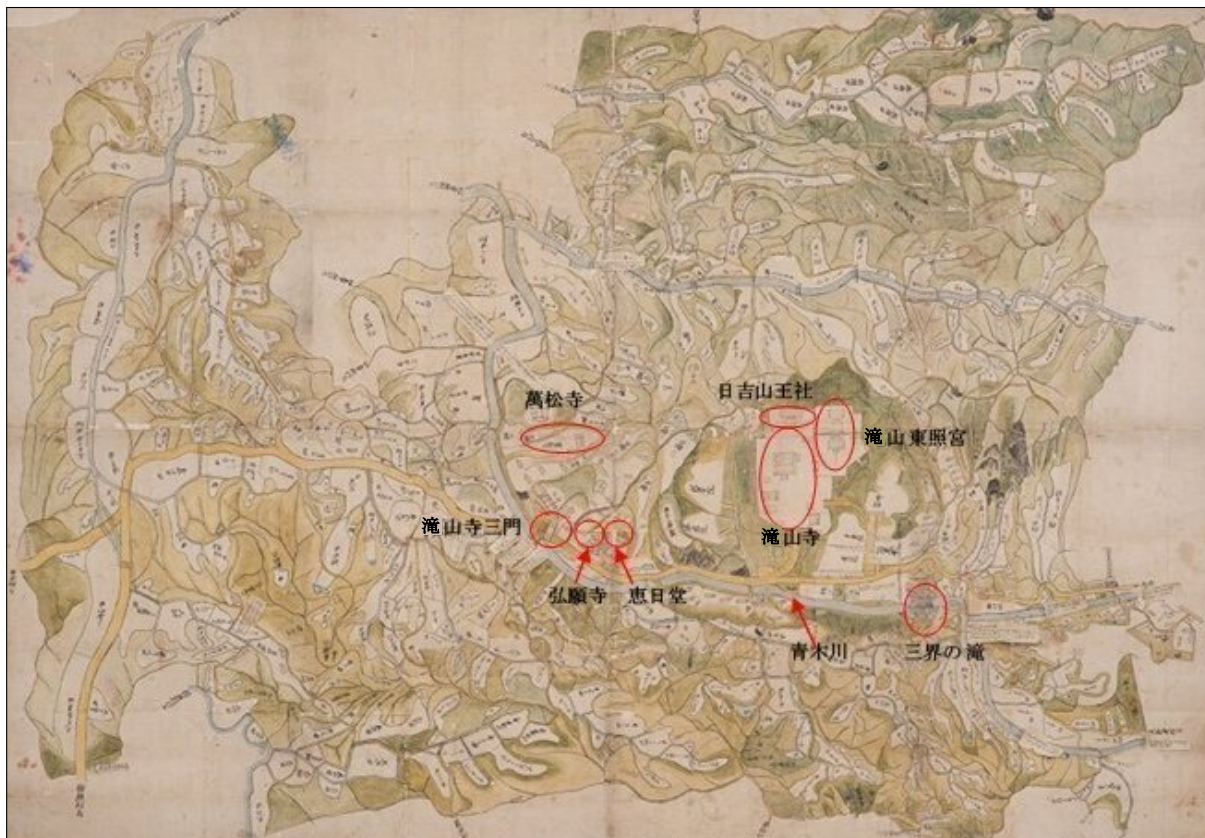


図2-3-13 瀧村地引大絵図(瀧町区有文書)

②祭り当日

当日の行事は下記のとおり執り行われる。まず、「行列」は幕府將軍の使者としての住職が江戸から到着したことを表し、滝山寺の三門から滝山寺本堂に向かって出立する。行列には冠面者や十二人衆、住職等が参列する。このとき、「瀧山寺鬼祭りの唄」が歌われ、町に祭りの始まりを告げる。2月の冷えた空気の中、静かなせせらぎと共に山峽を流れる青木川沿いに行列は進んでいく。唄の合間や道中休憩後の出立時にはほら貝が鳴らされ、山間の谷に響く。平地が少ない土地であり、一般には「谷ふさがり」といって避けることの多い寺の門前に並ぶ屋敷も多い。これらの屋根には、魔除けの屋根神として寺に向けて瓦製のしょう大黒天・鐘き・鳩などが上げられている。



図2-3-14 渡御行列出発の三門前



図2-3-15 滝山寺三門から本堂への行列

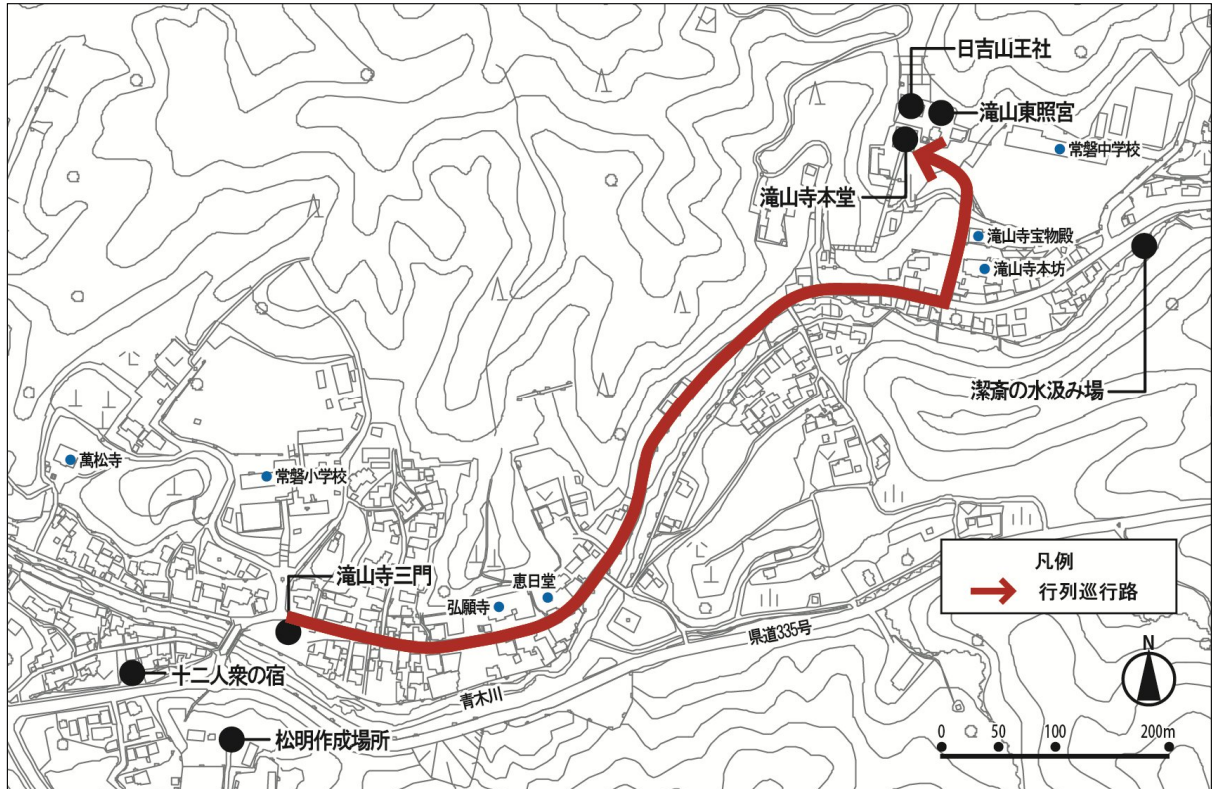


図2-3-16 滝山寺鬼祭り行列巡行図

行列が本坊へと到着すると、十二人衆は精進料理の饗応きょうおうを受ける。現在、山で採取したヤマクチナシを含むこの献立は祭りの見学者にも供されており、味覚で祭りを体感することができる。饗応の後、鐘楼の鐘と拍子木の音が、十二人衆の本堂への登山を知らせる。続いて本堂へと登山した住職により仏前法要が始まる。その最中、十二人衆は滝山東照宮・日吉山王社での長刀御礼振り等、所定の場所で様々な所作を行う。住職による鬼塚供養も法要の半ばに執り行われ、豆をまいて供養を行う。ここから、庭祭り(田遊び)が始まる。十二人衆の中でも上役に位置する東次郎、西次郎が長刀御礼振りとうじろう さいじろうで悪魔を払った後、同じくコツボネ、福太郎が鍬を担いで登場する。昼寝や寝言というユーモラスな場面も交え、呼びかけや台詞で力強く掛け合いながら、田遊びの所作が演じられる。内容は、田打ちしろか・代掻きしろか・苗代作り・種まき・田植えなどの農作業の様子である。太鼓の音に合わせて十二人衆によって、この祭り独自の田植え歌が披露される。



図2-3-17 庭祭り 昼寝の様子

庭祭り(田遊び)が始まる。十二人衆の中でも上役に位置する東次郎、西次郎が長刀御礼振りとうじろう さいじろうで悪魔を払った後、同じくコツボネ、福太郎が鍬を担いで登場する。昼寝や寝言というユーモラスな場面も交え、呼びかけや台詞で力強く掛け合いながら、田遊びの所作が演じられる。内容は、田打ちしろか・代掻きしろか・苗代作り・種まき・田植えなどの農作業の様子である。太鼓の音に合わせて十二人衆によって、この祭り独自の田植え歌が披露される。

歌が終わり火祭りに突入すると、滝山寺の内陣では半鐘、双盤、太鼓がけたたましく連打

され、ほら貝が吹き鳴らされる。この音と共に燃え盛る大松明を持った男たちと祖父面・祖母面・孫面を被った3鬼が本堂の外陣と回廊を駆け巡る。孫面の鬼は、初めは右手にまさかり、左手に松明を持って登場するが、途中から豊作を意味する丸餅を持って現れる。大松明を持ち、乱舞するかのように走る人々、鳴り響く音、炎の熱気に包まれ、祭りは最高潮を迎える。大きく火の手が上がり、松明からはじけ飛ぶ火の粉が見学者の方へ降り注ぐと、歓声上がる。見学者は火の粉を浴びて五穀豊穡や家内安全を祈願するからである。やがて、大役の拍子木とともに一斉に火が消され、静寂な一山に帰って祭りは終わる。祭り終了後は、祭りの参加者や見学者が堂内に上がり、消された松明や松明の燃えさしを縁起物として持ち帰る。



図2-3-18 日吉山王社前での松明点火



図2-3-19 火祭り

祭りは「瀧山寺鬼祭り保存会」を始め、地区全体で実施されている。一般の見学者にも供される精進料理は、地区の女性たちが協力して整えている。滝山寺の隣に位置する常磐^{ときわ}中学校の生徒たちは鬼の顔をかたどった土鈴等を製作し、バザーを実施して参加している。また、火祭りにあたっては地元消防団が滝山寺本堂屋根への事前放水を行い、本番中は万が一に備えて待機している。このように、地区全体で祭りを支え、盛り上げようという思いが活動となって表れている。



図2-3-20 精進料理

③祭り翌日及び翌年度への準備

午前8時から、十二人衆は宿の片づけを、保存会の有志は本堂周辺の片づけを始める。宿では使用した食器類を片づけ、庫裡^{くらり}へと収納する。本堂付近では松明や火消しに使われた桶

の水もそのままになっているため、桶の水抜き、^{すす}煤や松明の^{かけら}欠片で汚れた本堂内部の掃除を丁寧に行う。松明は十二人衆が耕作している田へ返される。

また、鬼祭り執行日の1週間前の吉日に冠面者3人によってつくられた御供え用の鏡餅5つは冠面者に3つ、十二人衆に2つ、各組に1つ渡され、それぞれで小分けにして関係者や各戸に配られる。

また、片づけと共に次の年の祭りに向けた準備も進められる。松明に使う竹は寒のものがよいとされるため、毎年、鬼祭り後の寒さの強い2月下旬に十二人衆によって大松明用の竹や笹の準備が行われる。竹は十二人衆が所有する滝町内の竹やぶ等から調達され、一定の長さを測って伐採していく。竹の枝は払い、束にして1年間保管しておく。片づけやこの時期の準備は、祭りを次の年へつなげるための大切な1つの過程である。

祭り当日はもちろんのこと、開催前の準備や翌年度に向けた資材の調達等を、季節に配慮しながらそれぞれが行う様からは、山あいの厳しい自然環境の中で住民が一体となって五穀豊穡を願う様子がみられ、そうした取組みを後世に受け継いでいこうとする住民の気概が強く感じられる。

(5)おわりに

滝山寺の位置する滝地区は、^{やはぎがわ}矢作川支流の青木川流域にあり、三河山間部の入口にあたる。深山霊谷の観あり、川床は岩盤が表れ急溪流となっている。山地に接しながら、古代東海道の矢作川渡河点の1つであった大門地区へ通じる街道があり、中世以降も松平往還、大沼街道と三河山間部へ通じる街道筋にあったため発展した。特に滝山寺中興の祖^{ものべし}仏泉永救が古代豪族^{部氏}の外護により堂を築いた頃から発展を始め、中世には源頼朝、熱田大宮司家、足利家の寄進を受けて滝山寺は最盛期を迎えていく。近世には徳川将軍家から朱印地を^{あんど}安堵されたため、滝地区は朱印寺社領地としての景観を成していった。



図2-3-21 青木川

滝地区は山間に位置するため、元々は棚田での耕作が行われていたが、水田は減少しつつある。現在、滝地区には大沼街道を起源とする市道瀧山寺^{みち}参道線及び県道477号東大見岡崎線南側に新たな道路が開通したため、交通量が減少し、祭りの行列が歩く滝山寺三門から本堂までの道には旧道として歴史を感じる良好な環境の市街地が形成されている。

⁸ 大和国山辺郡・河内国渋川郡あたりを本拠地とした有力な豪族。

また、滝山寺、滝山東照宮、日吉山王社はひとつの境内に配置されており、中世から近世にかけての神仏習合の様相と各建物が一体となって織りなす景観を見ることができる。これは五穀豊穡を祈る寺の正月行事である修正会と宮中の行事である追儺式が変化した鬼祭り・火祭りが一体となったのを示す好例である。溪流に沿って通る街道を歩く行列に始まり、滝山寺の境内地を舞台に松明30数本を持ち込み、^{はんしょう}半鐘、^{そうばん}双盤、太鼓を乱打し、^{みかわじ}ほら貝が吹き鳴らされるなかで鬼が乱舞する。瀧山寺鬼祭りは、天下泰平・五穀豊穡を祈り、^{みかわじ}三河路に春を告げるといわれ、岡崎を代表する歴史的風致となっている。



図2-3-22 滝山寺、日吉山王社、滝山東照宮

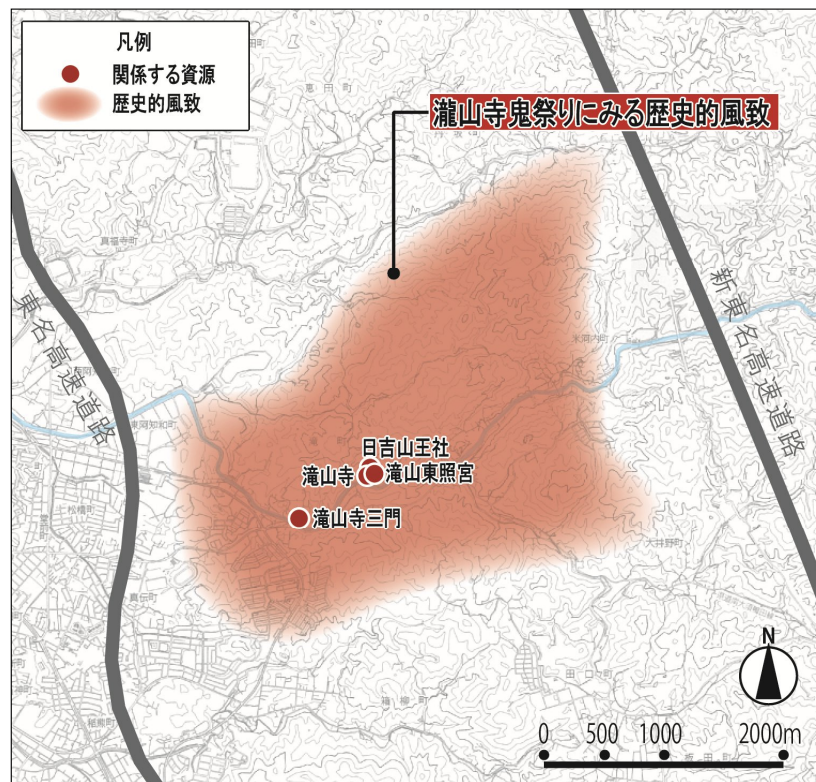


図2-3-23 瀧山寺鬼祭りにみる歴史的風致の範囲